

イギリスの「社会的コンピタンス」研究

山田 富秋

私の研究関心が「会話分析 (Conversation Analysis)」（例えば、好井・山田・西阪編『会話分析への招待』世界思想社、1999年参照）に影響を受けた子ども研究であるため、それに関連する英米の子ども研究の最近の動向を調べていくうちに、イギリスを中心にヨーロッパで90年代初頭から新しいパラダイムとして注目を集めている「社会的コンピタンス」研究に行き当たった。具体的には、I. Hutchby と J. Moran-Ellis 編集の *Children and Social Competence: Arenas of Action* (London, Falmer Press, 1998) という本との出会いである。彼らによれば、この研究に先鞭を告げたのは、A. Prout and A. Jamesによって編纂された *Constructing and Reconstructing Childhood* (London, Falmer Press, 1990) であるという。

このパラダイムの斬新なところは、伝統的な発達心理学や、社会学における社会化論が前提としてきた、大人を到達点とした子ども観と決定的に袂を分かち、「子ども期」が自然な現象ではなく、むしろ、歴史的・文化的に変化する社会的構築物であると主張した点にある。このパラダイムは子ども期を一つの社会制度として捉えるという意味で、政治的な志向性を持っている。つまり「子ども期」の成立を自然な現象と見なすこと自体、政治的に作り出されたものなのである。(山田富秋「子ども現象とエスノメソドロロジー」『児童心理学の進歩』金子書房、1997参照) この観点からすれば、子どもはコンピタントな(能力のある)社会的主体であり、子ども期はこのコンピタンスを拘束したり、あるいは逆にそれを開花させたりする社会的に構築された行為領域 (arenas of action) なのである。そして、このパラダイムは、子どもの社会的コンピタンスと、それが位置づけられる行為領域との関係を経験的な方法を使って詳細に明らかにしようとする。つまり、この立場に依拠する研究者たちは会話分析や談話分析を含めた詳細なフィールドワークに志向している (I. Hutchby and J. Moran-Ellis, 1998, p. 5-6.)。

I. Hutchby と J. Moran-Ellis 編集の本書には11本の論文が寄稿されており、編者の「社会的コンピタンス」パラダイムの紹介論文を皮切りに、「コンピタンスと家族構造」「談話のコンピタンスの文脈」「コンピタンスと制度的知識」という三部構成になっている。寄稿者たちは全員で16人であり、彼らの専門領域は、教育学、心理学、社会学、文化人類学、社会福祉、言語学、コミュニケーション学と多岐にわたっている。この陣容からみても、さまざまな学問領域を横断した学際的な研究分野と言ったほうが適切だと思われる。

紙幅の許す範囲で、具体的な研究内容を紹介したい。まず第一部で取り上げる家族研究は、子どもの社会化の中心的なエージェントとして家族を捉えること自体に疑問を投げかける。序文でAllison Jamesの言うように、子どもの性的虐待という事実は、家族が子どもにとっていつも「安全」な場所であるとは限らないことを示している。したがって、現在子どもたち

の社会的コンピタンスが置かれている家族状況を明らかにすることが課題となる。この問題意識を反映するように、L. Alanenは、北欧四カ国のワンペアレント・ファミリーでの子どもの生活を研究対象とする。また、R. Bakerは家計に貢献するために進んで「ストリート・チルドレン」になっていくネパールの十歳前後の子どもたちを研究する。第一部の最後のH. Barrettの議論は有名なボウルビーの母性剥奪の理論に対して、フィールドワークに基づき正面から反論する。第二部は、談話分析と会話分析に基づく子どもたちの相互行為の詳細な分析である。R. SandersとK. Freemanは、仲間集団において将来の協同行為が誘導される様子を明らかにし、H. Gardner は言語障害を持つ子どもとセラピストとの相互行為を分析し、J. Thornborrowは、子どもが参加するテレビ番組における大人の課す制限を描き出す。最後の第三部は「制度的知識」を扱っている。ここでは、大人によって定義された制度的言説が子どもを対象化する様子、そしてこれに対抗する子どもの側の知識を問題にする。S. DanbyとC. Bakerは幼稚園での先生と子どもの「けんか」の扱い方の違いを、P. Christensenは同様に、家庭における薬の使用についての大人と子どもの違いを明らかにする。G. de. Montignyは児童福祉制度において子どもが一方向的に受動的な対象とされる様子を、そして、D. SilvermanとC. BakerとJ. Keoghは、先生と子どもと親が一緒にいる場面での子どもの沈黙現象を制度的文脈から明らかにする。

以上、説明できなかったところは実際に一読されることを薦める。いずれにせよ、今後の子ども研究に対して刺激的な動向であることは確かである。